

一、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

花岡沙弥は、中学二年の九月にマレーシアの学校から転校してきた。二期が始まって早々、中学三年の図書委員で督促女王の異名を持つ佐藤先輩に呼び出され、吟行（短歌を詠むために外へ出かけること）に連れて行かれる。そこで初めて短歌を詠み、興味を持った沙弥は、毎週木曜に佐藤先輩のパートナーとして一緒に吟行に行く約束をするのだが……。

「さーや、今日バスケ部見学に来る？」

翌週の木曜日、給食の時間。朋香ちゃんに言われるまですっかり忘れていた。そういえば誘われていたんだった。

「あ、えーっと。ごめん。今日はちよっと。」

「そっかあ、残念。」

転校生のわたしは、今月中に部活を決めることになっている。部活は強制じゃないけど、中二のほとんどは何かしらの部に入っているみたいだった。

「バスケ部って木曜日が活動日なんだっけ？」

「うん。週二回。月曜と木曜だよ。わりとゆるくて楽なんだ。」

ダメだ、吟行とダブってる。佐藤先輩との吟行は、毎週木曜日だ。

「何か、習い事があるの？」

1 「じゃ、ないんだけど……、木曜日はちよっと用事があった。」

佐藤先輩と一緒に短歌を詠むことにしたの、なんて言えない。

だって、督促女王なんて変なあだ名つけられちゃうような人と仲よくしているなんて知られたくない。

そのとき、勢いよく扉が開いた。

振り返らなくても誰か分かる。

だって今日は木曜日。督促女王こと、佐藤先輩が登場する日だ。

一週間前とまったく同じシチュエーション。わたしはとっさに目をそらして、わかめごはんを一気にかき込む。顔が隠れるように、食器を斜めに傾けて。

来るな、来るな、話しかけないでよ。

わたしの願いははねのけられ、

「今日も三時半に図書室でね。」

佐藤先輩がわたしの横で立ち止まって言った。

わたしは聞こえないふりをした。

2 「聞いている？ 三時半に出発するよ。」

この人は短歌を詠むくせに空気を讀まない。

わたしは、チラリと顔を上げ、

「はい……。」

首をかがしているカメのようにひかえめにうなずいてみせた。

「どこに出発するんすかっ？」

オカモトくんが佐藤先輩にきいた。

「ヒミツ。」

にやっと笑った佐藤先輩が離れると、恐れていた事態がやってきた。

「さーや、今日、督促女王と何の約束してるの？」

「いや、とくに……。」

「でも、出発って言うってたよ？」

「ああ、うん。なんていうか、まあ……。」

朋香ちゃんの顔に疑問の表情がうかぶ。

「だからバスケ部来られないのか。仲いいんだね。」

「そういうわけじゃないよ！」

わたしは、必死に首を横に振る。

朋香ちゃんを失いたくない。

佐藤先輩へのイライラが募る。

やめて、教室で話しかけないで。わたしまで変わり者だと思われちゃうから。

「無理やり連れていかれるだけなんだよ。ほんとに迷惑！」

3 そう言った瞬間、我に返った。

言いすぎた。

わたしがあわてて教室を見回すと、もう佐藤先輩はいなかった。

大丈夫。聞こえてない、よね。

(中略)

放課後、指定された時間に図書室に行くと、どこにも佐藤先輩の姿はなかった。

待つてみるけれど、三時四十五分になっても、四時になっても現れない。

「あの、督そ……、佐藤先輩どこにいるか知りませんか？」

カウンターでパソコンに向かっていた司書の七海さんにきいてみた。

「さあ……今日は見てないね。明日の昼休みは図書委員の当番で来るけど。三年A組の教室のぞいてみたら？」

ああ分かりました、と答えたものの、ちよつと気が引けた。上の学年のクラスをのぞくのってすごく勇気がある。

図書室から出て、教室の扉にはまっている窓から佐藤先輩の姿を捜した。

いない。数人が窓際に集まって何かしゃべっているだけだった。

残念、かも。

わたしはいつの間にか吟行を楽しみにしていたみたいだ。

翌日の昼休み、佐藤先輩は図書室の書架の整頓をしていた。

「昨日、吟行するんじゃないかなかったんですか？」

わたし、待つてたんですけど、ということアピールするように、わたしは少し口をとがらせた。

「もう行かないよ。」

「え？」

5 「花岡さんと吟行はしない。」

佐藤先輩はわたしのほうを見ず、本の背ラベルに目を向けたまま言った。

「わたしといるところを見られるの、嫌なんですよ？」

ああ。

昨日の給食の時間、自分の口から飛び出た言葉を思い出す。

「無理やり連れていかれるだけなんだよ。ほんとに迷惑！」

6 あの言葉が聞こえていたなんて……。

わたし、サイテーだ。

「ごめんなさい。あの……。」

ちがうんです、と言おうとしたけれど、言えなかった。

何も、ちがわないじゃないか。

下級生からも変わり者扱いされている佐藤先輩と、仲よくしていることを周りに知られるのが嫌だった。

わたしまで変わり者のカテゴリーに入ってしまうと思ったから。

なのに、二人でいるときは仲よくしたいなんて、虫がいい。

佐藤先輩の気持ちなんて考えていなかった。

「わたし、周りから自分がどう呼ばれているかなんて知ってるよ。いばって督促状を持ってくるから、督促女王。どの教室も、わたしが入っていくと嫌そうな顔をする。」

「わたしは……。」

「いいよ、自分の身を守りなよ。わたしとちがって、中学生活まだまだ続くんだから。居心地いい寝床は必要だよ。」  
佐藤先輩はくちびるだけで微笑んでいた。怖いと思った。だってそれは、本当の笑顔じゃないと分かったから。  
昼休みだけじゃない、何かもつと大事なものの終わりのような予鈴が鳴る。

「それじゃあ。」

佐藤先輩はわたしの横をすり抜けた。

「じゃあ七海さん、戻りますね。」

「お疲れさま。今日はもう一人の当番の服部さん来なかったわねえ。」

「来週はサボらないように言っておきます。」

佐藤先輩と七海さんのやり取りが耳に届く。

わたしも教室に戻らなくちゃ。でも、動けない。

そのとき、本棚に並んでいる一冊が目に残った。

何だか懐かしさが胸に広がって、それがマレーシアの日本人学校の図書室で読んだ小説だと少し遅れて気がついた。  
その本を見つめていると、

「あら、花岡さん。もう本鈴鳴るよ。教室戻って……ていうか、どうしたの？」

七海さんに声をかけられた。

「あ、えと、その。これ借りたくて。」

わたしはとっさにごまかし、人さし指をかけて本棚からその本を抜き出した。

この本を胸に抱えて目を閉じたら、マレーシアの日本人学校の図書室にワープできればいいのに。  
そんなファンタジーの世界のようなことを考えたら、涙が出てきた。

「この本、マレーシアで通った学校の図書室にもあったんです。わたし……マレーシアに帰りたい。」  
わたしは日本に帰ってきてから、周りの目ばかりを気にしている。

どうして。どうして。

わたしは悔しかった。

飛行機で運ばれる間に、自分の性格が変わってしまったような気がする。

マレーシアはいろんな民族がごっちゃに暮らしている多民族国家だ。

わたしは、マレーシアには東南アジア系の顔の人たちだけが住んでいると思っていた。でも、そうじゃなかった。

電車に乗っても、一つの車両にいろんな人たちがいた。

トウドウンと呼ばれるベールを被ったイスラム教徒の女性たち。そのトウドウンはカラフルで、数人で身を寄せている後ろ姿は、きれいな羽の鳥たちみたいに見えた。

その前でおしゃべりしているのは、わたしたちとよく似た中華系の人たち。(でも、髪型や服のセンスとか、どこか日本人とちがう。)

ドアに寄りかかっているのは、目のぼつちりしたインド系のお兄さんたち。

マレーシア語も、英語も、どこの国か分からない言葉も混ぜこぜで聞こえてきた。

そんな車内から、窓の外の景色以上に目が離せなかった。

タブンカ、なんていう言葉はまだよく知らなかった。でも、一つハッキリ言えることは、わたしの気分がかなり上がったということ。

すごい、すごい、すごい。

暮らし始めると何を見ても新鮮で、サイダーの泡みたいな刺激があった。

扉を完全に閉じる前に走りだしちゃうバス。

舗装がポッコポコのアスファルト。

屋台で売られているカエル肉の料理。

鼻にパンチを食らわすドリアンが山積みになった出店。

バッサバッサと葉が生い茂るヤシの木たち。

大自然と都会がとなり合わせにあつて、街の中心にはペトロナスツインタワーと呼ばれるトウモロコシみたいな形のビルがそびえ立つ。

蜘蛛の巣みたいな大きなヒビを窓ガラスに入れたまま走っている電車もあった。解放感、というのかな。

ここに來ることができてすごくラッキーだと思った。

みんなと同じものを持たなくちゃ、同じようなタイムで走らなきゃ、同じものをおいしいと思わなきゃ。

マレーシアに來る前のわたしはそんな思いにとらわれていた。それは四年生の後半あたりからわたしの胸に蜘蛛の巣のように張りついていた。

でもここは、人どちがついていても仲間外れにされちゃうような場所じゃない。マレーシアで、わたしたち兄妹が入った日本人学校もそうだった。

インターナショナルスクールってガラじゃないよね、とか言ってお父さんとお母さんが決めた学校だったけれど、学年の隔てはなくて自由だった。一つ二つの歳の差なんて気にせず、よく一緒に遊んでいた。なのに、今のわたしときたら。

人どちがうことを怖がつて、人どちがうことを否定して。

こんな自分、嫌だ。

「花岡さん。」

とん、とん。七海さんは横からわたしの背中を優しくたたき、

「その本、私も好きだよ。」

ほんわかした口調で言った。

「私が中学生のころに発行された本なの。主人公の女の子に、自分を重ねて読んでた。」

わたしはまじまじと七海さんの顔を見る。

大人の人の年齢がよく分からないけど、七海さんはまだお姉さんって呼べるくらいには若い。白い肌には少しソバカス

があつて、赤いフレームの眼鏡の奥の目がどんぐりみたいに丸くて茶色い。

それでも、この人が中学生のころって、きつと十年以上前の話だ。

「私は、昔から本が好きだったから、休みの日は一日中、自転車に乗って図書館巡りしてたの。たいていの図書館にその本は置いてあつた。それがすごく心のよりどころになった。嫌なことや悲しいことがあつて自分の心がグラグラになつても、その本は私が行く先々で、どこでも同じ凜とした姿で図書館にある。それを見ると、安心して、私も自分の気持ちを立て直すことができたの。」

マレーシアの日本人学校の図書室にも、この中学校の図書室にも。遠く離れた場所でも、この本は変わらない……。

そういえば、マレーシアの日本人学校に編入したばかりのころ、日本でよく読んでいた本が図書室にそろつていて、何だかほつとしたつけ。

10 今はその逆だなんて笑つてしまう。

「佐藤さんね、編入してきたあなたのことを気にしてたよ。佐藤さんも転校生だったから、花岡さんの心配や緊張を和らげようとして、それで吟行に誘つたんじゃないかな。ただ、不器用だから、あんな命令口調になつてたけど、花岡さんと仲よくなりましたかっただんだと思うよ。」

わたしと仲よくなるうと……？

もし、それが本当だったら。単に出席番号が三十一だからだけじゃないとしたら……。

わたしはひどいことを言ってしまった。

そう思つたとき、本鈴が鳴つた。

「教室に戻れそう？」

わたしはうなずいた。

教室に戻る途中、埃の転がる廊下を急ぎ足で進みながら考える。

佐藤先輩に謝らなきゃ。

どうにか、仲直りをする方法……。

気持ち伝えるにはどうすればいい？

月曜日の朝、わたしは三年A組の後ろの扉をそろりと開けた。

佐藤先輩の目印はつややかなロングヘア。教卓の目の前の席で本を開いているのが、すぐ目に入った。

「失礼します！」

思った以上に大きな声が出て、教室にいる人たちの視線がわたしに集まる。

11 怖くない、怖くない。わたしは自分に言い聞かせ、ずんずんと目指す席まで進んだ。佐藤先輩は振り返らないままだ。

「あの、これ！」

わたしはタンカードを渡した。

「何？」

「この間の続きを見てみてください。わたしの短歌が書いてあります。」

それだけ言うと、佐藤先輩の言葉を待たずに、教室を出た。

12 わたしの伝えたいことは、あの短歌に託してあるから。

「ジャランジャラン 願いを込めてもう一度いっしょに歩いてみたい道です」

伝わりますように。

放課後、待ち合わせているわけじゃないけれど、わたしは図書室にいた。佐藤先輩に会えるとしたらここだから。

「何？ ジャランジャランって？」

声のほうを見ると、佐藤先輩が本棚に寄りかかって腕組みをしていた。

「ジャランは、『道』。ジャランジャランで『散歩』っていう意味になります！」

来てくれた。

それだけのことがうれしくて、わたしは図書室なのも忘れて大きな声で答えた。

そして大きく息を吸う。

「ごめんなさい！」

耳にかけていたポプの毛先がばさりと落ちる。

「わたし、吟行楽しみにしてたのに、なのに、周りにどう見られるか気にして……。すごくかつこ悪かったです。」

「顔上げなよ、もう気にしてないから。」

「ほんとですか。」

13 佐藤先輩の顔を見ると、少しきまり悪そうに目をそらされた。

(こまつあやこ)「リマ・トゥジュ・リマ・トゥジュ・リマ・トゥジュ・トゥジュ」

⑩ タンカード＝短歌を書き留めておくカード。初めての吟行の時に、佐藤先輩から渡された。

問一——線部I「じゃ、ないんだけど……、木曜日はちょっと用事があった」とあるが、この時の「わたし」の気持ちは

どのようなものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア もともと吟行にはあまり行きたくなかったのだが、かといってその気持ちを朋香にうまく説明するのも難しく、とっさに言葉が出てこないまま混乱している。

イ うそをついてまで朋香の誘いを断ることに抵抗があるが、一方で木曜に吟行に行くかどうかはまだ決めかねており、どっちつかずの気持ちのまま迷っている。

ウ 吟行に行く約束より朋香とかわしたバスケ部見学の約束の方が先だったと思い出し、そのことについてきちんとした言い訳をしなければと思ってあせっている。

エ 木曜に吟行に行くことについては朋香に話したくないのだが、一方で習い事があるとうそをつくこともしたくないので、どう言えばよいか分からず困っている。

問二——線部2「この人は短歌を詠むくせに空気を読まない」とあるが、それはどういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本当は一緒に短歌を詠みに行きたくないという「わたし」の気持ちを、佐藤先輩がまったく分かってくれないということ。

イ クラスのみんなが、佐藤先輩に「督促女王」というあだ名をつけて怖がり、嫌がっていることに気づいていないということ。

ウ クラスのみんなの前で佐藤先輩に話しかけられたくないと思っている「わたし」の気持ちを感じとってくれないということ。

エ 「わたし」が入ろうと思っているバスケット部の活動日が木曜で、吟行に行く日と重なっているのに気づかってくれないということ。

問三——線部3「そう言った瞬間、我に返った」とあるが、この時の「わたし」の気持ちはどのようなものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 朋香たちの前で無理やり吟行に誘う佐藤先輩に対して、ここ数日がまんしてきたイライラが思わず口について出てしまったことに気づき、あせっている。

イ 朋香やクラスメイトに短歌を詠む変わり者だと思われるのがはずかしくて、佐藤先輩に失礼なことを言ってしまったことに気づき、申し訳なく思っている。

ウ 朋香やほかのクラスメイトとの友人関係を守ろうとして必死になるあまりに、佐藤先輩にひどいことを言ってしまったことに気づき、後悔している。

エ 朋香と同じクラブに入るために吟行の約束を破ったことで佐藤先輩からおこられるかもしれない、軽はずみな発言だったと気づき、おじけづいている。

問四——線部4「わたしは少し口をとがらせた」とあるが、これは「わたし」のどのような気持ちを表したのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 佐藤先輩がわざわざ誘ってくれたのに、教室ではつきり返事をしなかった自分が悪いのだと反省する気持ち。

イ 教室では聞こえないふりをし通したが、実は自分は約束通りに来ていたのだということを強く訴えたい気持ち。

ウ 吟行を楽しみにしていてずいぶん長い間待っていたのに、佐藤先輩が来てくれなかったことを残念に思う気持ち。

エ 自分から三時半に図書室に来るように言っておきながら、約束をすっぱかした佐藤先輩のことを非難する気持ち。

問五——線部5「佐藤先輩はわたしのほうを見ず、本の背ラベルに目を向けたまま言った」とあるが、ここには「佐藤先輩」のどのような気持ちが表れているか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分と吟行に行くことを他人に知られたくないと「わたし」が思っていると知り、裏切られた思いでおこっている。

イ 自分が吟行に誘うことで「わたし」につらい思いをさせていたと知り、もう二度と迷惑はかけまいと思いつめている。

ウ 自分で誘っておきながら待ちぼうけをくわせたことで、「わたし」に合わせる顔がなく、申し訳ない気持ちでいる。

エ 自分の吟行の誘いを迷惑がったり、反対に吟行に行かないとおこったりする「わたし」の身勝手さととまどっている。

問六——線部6「わたし、サイテーだ」とあるが、どのようなところを「サイテー」だと考えているのか。六〇字以上、八〇字以内で説明しなさい。

問七——線部7「何かもつと大事なものの終わり」とあるが、どのようなことを表しているか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 友達と一緒に悪口を言ってしまったことで、取り返しのつかないほど佐藤先輩を傷つけたかもしれないということ。
- イ 佐藤先輩と一緒に吟行に行ったり、親しく接したりするような関係にはもう戻れないかもしれないということ。
- ウ 佐藤先輩に目をかけてもらいながら、同級生とも仲よくすることができなくなってしまいかもしれないということ。
- エ 実は頼りにしていた佐藤先輩に見放され、これからは孤独な学校生活を送るようになるかもしれないということ。

問八——線部8「わたし……マレーシアに帰りたい」とあるが、そう思ったのはなぜか。その理由を六〇字以上、八〇字以内で説明しなさい。その際、マレーシアにいたことと日本に帰ってきた今とのちがいが明らかになるようにすること。

問九——線部9「その本、私も好きだよ」とあるが、この時七海さんは、沙弥に向かってなぜ「その本」が「好き」だと言ったのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 中学生のころ、主人公の女の子に自分を重ねてその本を読むことで、自分とは異なる別の人生を味わうことができ、幸せな気持ちになれたから。
- イ 昔から本が好きで休日に図書館巡りをしていた時に、この本がたいの図書館に置いてあり、多くの本の中でも特に親しみを感じていたから。
- ウ 中学生のころに感動したその本の凛とした姿を目にすると、大人になった今も身が引きしまる思いがし、司書としての仕事に張りが出るから。
- エ 自分が中学生のころ、気持ちのゆれ動くような出来事があった時に、その本が心の支えとなって気持ちが立て直せたという経験があったから。

問十——線部10「今はその逆」とあるが、どういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア マレーシアの日本人学校では日本でよく読んだ本を図書室で見つけることで心が安らいだが、日本に帰ってきた今は、マレーシアでよく読んだ本を図書室で見つけることでつらい気持ちになること。
- イ マレーシアの日本人学校に編入したばかりのころは、日本でよく読んでいた本が図書室にたくさんあったが、日本の学校の図書室ではマレーシアでよく読んでいた本はなかなか見つからないこと。
- ウ 日本からマレーシアに行った時には、日本でよく読んだ本を発見してほっとしていたが、マレーシアから日本に帰ってきた今は、マレーシアで読んだ本を日本で見つけて懐かしく思っていること。
- エ マレーシアにも日本の本がそろっていたことでマレーシアも日本と同じだと安心したが、日本でマレーシアにいたころ読んだ本を見つけた今は、マレーシアとちがう日本に不安を感じていること。

問十一——線部11「怖くない、怖くない。わたしは自分に言い聞かせ、ずんずんと目指す席まで進んだ」とあるが、この時の「わたし」の思いはどのようなものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 上級生ばかりの教室に入っていくだけでも気後れしそうになるのに加え、気を悪くしている佐藤先輩に話しかけなければならぬので、勇気をふりしぼり、自分の心を奮い立たせようと思っている。
- イ 上級生の教室に入っていくのは恐ろしかったが、今落ちこんでいるはずの佐藤先輩を元気づけるためには自分がここでふみとどまらなければならないと決意し、自らの気持ちをはげまそうと思っている。
- ウ 上級生の教室にたった一人が入っていくことには心細さを感じるが、自分を吟行に誘ってくれた佐藤先輩ならたとえ上級生でも恐れる必要はないと、自分で自分の心を落ち着かせようと思っている。
- エ 上級生の教室に入っていくかなければならぬように、おこっている佐藤先輩に声をかけるのは緊張するが、自分の思いは必ず伝わるはずだという自信もあるので、堂々とカードを渡そうと思っている。

問主 —— 線部12「わたしの伝えたいこと」とあるが、それはどういうことか。解答らんの文末に合うように、二五字以内で答えなさい。

問主 —— 線部13「少しきまり悪そうに目をそらされた」とあるが、佐藤先輩はどのような気持ちで「目をそら」したのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 転校生だった自分には「わたし」の気持ちが分かるはずなのに、腹を立てて冷たく接してしまった自分をかえりみて気はすかしく思う気持ち。

イ 自分が理不尽に腹を立てていて、「わたし」はまったく悪くないにもかかわらず、一方的に謝らせてしまったことに対し申し訳なく思う気持ち。

ウ 心の中では「わたし」のことをまだ許していないのだが、人前なので謝罪を受け入れざるを得ない状況になってしまい不満に思う気持ち。

エ 本当はもう「わたし」のことなどどうでもいいと考えていたが、はっきりそう言うと「わたし」を傷つけてしまうだろうと気まずく思う気持ち。

二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

映像は、指令からはじまる。「白い服のグループがバスを回した回数を数えてください」。そして、白い服と黒い服のグループがそれぞれ、バスケットボールでバスを回しはじめる。相手のグループの間を縫うように流動的に立ち位置をずらし、バウンドパスも入れたりするので、結構集中が必要だ。映像が終わると、正解の回数が示される。よし、あたり。ほっとしたところで「ところで、あなたはゴリラを見ましたか？」というキャプションが現われる。ん？ 映像が巻き戻し再生される。あるうことか、バスをしている人びとの横から着ぐるみのゴリラが悠々と現れて、真ん中で堂々と胸を叩いてから通り過ぎてゆく。

はじめて見たときは衝撃的だった。あんなに真剣に見ていたのに、まったくゴリラが見えていなかった。

わたしたちはふだん、目に入るたくさんものの中から、そのとき必要なものだけを選んで注意を向けている。その「選択的注意」のおかげで、雑踏のなかで知り合いを見つけたり、がやがやした居酒屋で相手の話す声を聞きとったりすることができる。白服とボールだけに注意を向けているからゴリラが見えない。

(中略)

ちゃんと見ているつもりでも、見えていないものがたくさんある。むしろ、しっかりと見ようとすればするほど、見えなくなっているのだ。見えないゴリラに気づく人も一定数いるが、バウンドのパスとそうでないパスを別々に数えるなど難易度を上げると、気づかない人が増えるという。

無駄な情報を切り捨て、必要な情報だけに目や耳を向ける。瞬間ごとに情報の取捨選択をおこなうのは、脳の限られた容量を効率よくつかうためだ。

では、ふだんの生活のなかで必要な情報ってなんだろう。外を歩きながら考えた。道路に出て、まず、ぶつかったり、転んだりしないように気をつけるべきは、段差、電柱などの障害物、すれ違う人の動き。道路を横断するときには、横断歩道の位置や信号の色、近づいてくる車の動きも確認が必要だ。そして目的地に向かうために、案内板や地図を確認し、目印となる曲がり角のパン屋さんやお店の看板を探す。もともと情報を伝達するためにつくられた人工物は要チェックだ。

でも、それ以外の多くのものは、わざわざ注意を向ける必要がないものばかりだった。傘をもつべきか判断するのに晴れか雨か空を見上げる必要があるが、はるか上空の渡り鳥のV字編隊に気づく必要はない。街路樹は障害物として認識する必要はあるが、地衣類がこっそり彩っていることに気づく必要はない。

今度は公園の森のなかに入る。道路を歩いてたときよりも必要な情報が少なくなり、不要な情報に目を向ける余裕が出てきた。カラスがかっこよく滑空して地面にすんと舞い降りる瞬間や、アリの巣穴が暗号のように並んでいるところ、クスの木の枝ぶりが、何があったのだろうかというような不思議な曲がり方をしていられるのも目に入る。

ふいに、上から何かくると優雅に回りながら落ちてきた。なんだろう、カエデの種かなと思つて拾いあげるとブナの木の小枝だ。左右交互に少しねじれてついた葉が、プロペラのような回転の力を生みだしていたのだろう。

おもしろいなあと思つた。そして、気づけば「おもしろい」と感じるものはすべて、不要な情報だった。

自分の場合は一人でおもしろがつているだけだけれど、人に見えていない「おもしろい」を抽出して表現につなげるのが、アーティストなのだろう。

さて、何が必要で何が必要かは、そのときの行動の目的や周囲の状況によつてまったく違う。

たとえば、電車に乗るために急いでいるときには、すれ違う一人ひとりの顔の情報はいちいち必要ない。でも、カイサツ口で待ち合わせの相手を探しているときには、その付近にいる人の背格好や顔、髪型や服装などに注意を向ける。このとき、相手の顔や容姿についての一連の知識（スキーマ）が呼び起こされ、それと照らしあわせることで、すみやかに認識できる。もつともそのせいで、背格好の似た別人に遠くから手を振つて、気まずい思いをすることもある。

必要な情報を瞬時に察知して認識するために、その状況やブレイクに関連したスキーマを準備しておく。文章に誤字があつても気づかずに読めてしまうのも、知っている単語のスキーマにあてはめて認識しているからだ。

（中略）

知識が増えるとスキーマも充実するので、わずかな手がかりからでも察知し、認識しやすくなる。この「知る」ことで見えてくるという感覚は、野生生物のフィールドワークのときにも強く実感することだ。

学生のころ、授業をきっかけにしばらくきこの採集に通っていたら、きこの察知能力が少し身についた気がした。はじ

めは山のなかを闇雲にうろうろ、きよるきよるして歩き回り、ようやく見つけるといふ感じだった。それがやがてなげなく山道を歩いていても、ふと、きこの目が飛びこんでくるようになった。

きこのこの好む場所がわかってきただけでなく、きこのこを採集するぞ、となると、目がきこのモードになつて検出力が上がった。いわば、きこのスキーマが発動した状態なのだろう。地面や木のミキ、倒木のすみ、少し離れた草むらの陰。なんとなく「！」と感じて、よく見ると、そこにきこのこがある。

ときどきバードウォッチングに通つていたこともあつて、そのときには鳥の検出力が少し上がった。この場合も、鳥見をするぞ、と思うと目が鳥モードになる。木の上などになんとか「！」と感じて、にらんでいると、鳥が枝を移る動きで居場所がわかるのだ。もつとも、鳥にくわしい人は、格段にすぐれた鳥察知能力をもっている。一緒に鳥見に行くと、街中の公園でも、こんなに多くの種類の鳥がいるのかと驚かされた。

生き物の存在を察知するときは、形より先に、質感や動きで察知しているような気がする。あるいはなんか匂う、というときもある。スキーマのなかに、質感や動きや匂いが含まれているからなのだろう。いずれも、「なんとなく」という感じなのは、「何か」として認知する、つまり意味処理される前の認知力テイで注意を向けているということなのかもしれない。

それは、ふだんの物のとらえ方と少し違う、原初的な感覚のようにも感じる。旧石器時代の人びとや縄文人など、狩猟採集生活をしてきた人たちは、おそらく相当感度の高いセンサーをもつて、獲物や採集物をとらえていたはずだ。

数年前、公園でふと「！」のセンサーが動いて、なにげなく上を見た。すると高い木の枝に、なぜかおにぎりがちよこんと置いてあつた。手が届かないので写真を撮つて拡大してみると、フィルム未開封の直火焼きたらこおにぎりだ。ヒトかカラスか、謎のままだったが、いずれにしても相当うっかりものだ。と思つたが、いや、自分もそういう不要なものに気をとられていたから、うっかり電柱にぶつかつたりするのだと反省した。

人間の認知のしくみについて知れば知るほど、絶対的なものなど何もないという気持ちになる。自分の見ている世界がかなり偏つたものであることには自覚的でいたい。

でも、見えていないものやゆがんでとらえているものがたくさんあるからこそ、芸術が生まれ、芸術を楽しむことができ

るのだと思う。

(齋藤亜矢「要、不要」)

⑧ 映像Ⅱ筆者は、これよりも前の部分で「selective attention test」(選択的注意テスト)という動画について説明している。  
キャプションⅡ映像にそえた説明のための字幕。  
地衣類Ⅱコケなどの、岩石や樹の上に生育する植物群。  
フィールドワークⅡ野外など現地で調査や研究を行うこと。

問一 〰〰線部 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ——線部Ⅰ「白服とボールだけに注意を向けているからゴリラが見えない」とあるが、そのようなことが起こるのはなぜか。その理由として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ゴリラは目に入ってはいるものの、映像の指令に従ってバスケットボールのパスの回数を数えるために、選手とボールばかりを見ることになるから。

イ 白い服と黒い服の選手たちが交わす、バスケットボールのパス回しの見事さに目をうばわれてしまうので、横切ったゴリラが目に入らなくなるから。

ウ 映像に出てくるキャプションにうながされ、ゴリラが現れる瞬間を確かめようとするほど、かえってボールの動きに気を取られてしまうから。

エ 私たちは必要なものだけにしか注意を向けないので、パスの中を横切るゴリラを認識していても、 unnecessary 情報として気に留めないようにしているから。

問三 ——線部Ⅱ「しつかり見ようとするほど、見えなくなっている」とあるが、どういうことか。次の中から適当なもの一つを選び、記号で答えなさい。

ア 注意してもものを見ようとすればするほど、無駄な力ばかりが入って視野がせまくなり、かえって対象が見えにくくなってしまうということ。

イ ものの動きが複雑になればなるほど、対象の動きをしつかり追おうとするので、かえって必要な情報がとらえられなくなってしまうということ。

ウ 一瞬も目を離さずに対象の動きを追いかけようとすると、かえって視線が安定せず、動きを正確にとらえられなくなってしまうということ。

エ 真剣に見ようとすればするほど、見ようとする対象に注意が集中することになり、それ以外のものは認識できなくなってしまうということ。

問四 ——線部Ⅲ「人に見えていない『おもしろい』を抽出して表現につなげるのが、アーティストなのだろう」とあるが、それはどのようなことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア わざわざ注意を向ける必要のない、人に見えていないような情報の方が「おもしろい」のだとわかっている、いつもその情報に注意をこらしているような人が「アーティスト」なのではないかということ。

イ ふだんの生活には不要な情報に目を向ける余裕があり、それを自分一人だけでおもしろがっているのではなく、他人にそのおもしろさをわかりやすく説明できる人が「アーティスト」なのではないかということ。

ウ もともと情報の伝達のためにつくられた人工物以外のものからも情報を読み取ることができ、その中でつねに瞬間ごとの情報の取捨選択をおこなっている人が「アーティスト」なのではないかということ。

エ 生きていくために必要不可欠な情報や記号ではなく、ふだんは人が気にもかけないような物事に興味をいだき、それを魅力的なものとして発信することができる人が「アーティスト」なのではないかということ。

問五 ——線部4「背格好の似た別人に遠くから手を振って、気まずい思いをすることもある」とあるが、なぜこのようなことが起こるのか。その理由として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 待ち合わせの相手はよく知っている人で、わざわざその背格好などをしつかり思い起こさないまま探すので、別人であつても似ている人がいたら、瞬時に本人だと認識してしまうから。

イ ふだんは、一人ひとりの背格好や服装など気にもかけていないのに、待ち合わせのために無理やりあいまいな記憶に頼つて探すので、似た別人を本人だと思い違いをしてしまうから。

ウ 待ち合わせの際には、あらかじめ想定している相手の背格好などの情報を付近の人にあてはめようとするので、その情報との共通点が多い人を、目的の相手だと誤解してしまふから。

エ 待ち合わせをしている時は、相手と早く会いたいとあせつて注意深く見極めたりしないため、背格好や服装が似ている人がいたら、瞬時に待ち合わせの相手だと早合点してしまふから。

問六 ——線部5「それがやがて、目に飛びこんでくるようになった」とあるが、なぜそのようなになったのか。その理由として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何度もきのこの採集をしているうちにきのこの生えている場所もわかつてきて、闇雲に歩き回らなくても、探すべき場所を正確に判断して、まちがいがなく探せるようになるから。

イ きのこの採集する経験の中で身につけたさまざまな知識が働くことによつて、きのこの生息する場所を、多くの手がかりや確かな根拠こんきょを手になくても察知できるようになるから。

ウ 自然に生息するきのこの自分の目で見ると経験を重ねるうち、倒木のすみや草むらの陰などの見つけにくい場所に生えているものでも、はつきりその形を見分けられるようになるから。

エ きのこの採集に出かける前に、目的地に関する多くの情報を分析ぶんせきすることで、あちこち探し回らなくてもあらかじめきのこの生息しそうな場所を特定したうえで探せるようになるから。

問七 ——線部6「ふだんの物のとらえ方と少し違う、原初的な感覚」とあるが、それはどのようなものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 周囲にただようささいな霧かすみの気きの違いに、自分でも明確に言葉にできないような感覚で反応するような、人々がまだ自然に頼つて生きていた時代から持っていたであろうものとのとらえ方。

イ 目や耳ではつきり確認する前に、わずかな匂いをかぎとつていち早くその存在を察知するような、狩猟生活を営んでいたころの人々が持っていたであろう動物的なものとのとらえ方。

ウ 対象に関する整理された知識がたくわえられることによつて、はつきりと言葉では意識していなくてもなんとなくその存在に気づいてしまふような、言葉を必要としないものとのとらえ方。

エ 色や形といった、はつきりと言葉に置きかえられるものに頼らず、肌で感じ取れるわずかな変化だけでもものの存在に気づくような、言葉を学習する前の人間のみが持つものとのとらえ方。

問八 ——線部7「自分の見ている世界がかなり偏つたものである」とあるが、それはなぜか。その理由として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日常生活の中では、身の安全や目的のために必要な情報以外は、意識的に見ないようにしているから。

イ その人が見ようとするものや、独自の感覚、持っている一連の知識によつて見えるものは異なるから。

ウ 人間は自らの経験やすぐれた認知能力にもとづき、いつも自分にしか見えないものを見ようとしているから。

エ 人によつて認知のしくみが違うので、自分に見えているものと他人に見えているものは絶対的に異なるから。

問九 ——線部8「見えていないものや（）芸術を楽しむことができる」とあるが、ここに表れた筆者の考えはどのようなものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間は自分にとって必要なものしか見ていないが、むしろ不要だと思われるものに注意をこらすことこそが、芸術的な感性の高まりをうながすことにつながり、その人だけに見えている世界を自分一人で楽しむようになるという考え。
- イ 人間の認知のしくみにはわかっている点が多く残されているが、だからこそ人間には無限の可能性があり、私たちが目に見えている世界に新たな解釈かいしやくをもたらず、すばらしい芸術が生み出される楽しみもまた残されているという考え。
- ウ 人によって見えているものはそれぞれ違い、そのたくさんの中の宿っている、新鮮な感覚を刺激するようなおもしろさを見過みかごさずにとらえることから芸術が生まれ、それに親しむことによって人生もまた豊かになるといふ考え。
- エ 芸術家とはふつうの人と違うものの見方や考え方ができる人のことであるが、そのような感覚を持つ人が多ければ多いほど、目に見える世界を正しく認知できる人が増え、芸術や文化が新たな方向へと発展する原動力になるといふ考え。



